2009年10月11日　主日礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙5章12～21節

説教題：ひとりの不従順とひとりの従順

1　全人類が罪を犯した

（1）私たちが希望を失うとき

続けてローマ人への手紙を見てまいります。前回、私たちが例え苦しみの中にあったとしても希望を持ち続けることができること。その希望は絶対に失望に終わらない。そういうことを見てきました。

私たちは、苦しいことが自分を襲ってきたとしても、希望があるならば、なんとかきょうも生きていこうという前向きな気持ちを持つことができます。どんなに難しい問題が降りかかってきても、私たちが希望を失うことがないというのなら、これは嬉しい話です。しかし現実はどうでしょうか。どんなことがあっても必ず希望があると言えるのか。ある人は言います。「歌にもあるように人生は三歩進んでも二歩下がることもある。でも後ろを向いてはいけない。ワンツーワンツー前を向いて歩いていこう。」確かにこんなふうにいつも前向きでいられるのであれば、だれも苦労はしません。しかし例えば、愛する者が死んでいくといときに、「ワンツーワンツー」と前向きに歌えるでしょうか。

福音書の中には、肉親や家族の死を嘆き悲しむ人たちのことがさまざまに描かれています。ルカの福音書には、あるひとりのやもめがひとり息子を亡くした出来事が記されています。イエスはちょうどその息子の葬儀の場に立ち会います。母親が亡くなった息子の遺体のそばに付き添って嘆き悲しんでいました。町の人たちも大ぜい母親に付き添っていました。町の人たちも、あまりにもつらい出来事がこの母親の身に起きたので、そのことを悲しんで集まって来ようなのです。

私たちは、いつも死のことは考えているわけではありません。しかし、身近な者が死んでいくとき、私たちはどうしても考えざるをえなくなります。なぜ愛する者が死んでしまうのか。なぜ自分は死ななければならないのか。

（2）「私は悪い人間ではない」

今朝の箇所でパウロは、12節でこう言っています。「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、それというのも全人類が罪を犯したからです。」

パウロははっきりと私たちが罪を犯したと言っています。これを聞いてある方は言います。「私は罪を犯していません。私はよい人間だとは言わないけれど、少なくとも警察に捕まるような悪いことは絶対にしていません。」

恐らくほとんど方は、同じ事を考えていると思います。しかし聖書で言っている罪と私たちが考えている罪は、大きく違っています。同じ「罪」ということばではあるのですが、内容が違う。ですから誤解が生まれます。聖書は罪とは何かについて、基準を示しています。そのうちの一つにこういうことばがあります。「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。隣人のものを欲しがってはならない。」

子どもの時、友達が新しい自転車を買って

もらったのを見て、非常にうらやましく感じたことを今でも覚えています。自分も自転車が欲しいと親に泣いてねだりました。親は新しい自転車ではなく、中古の自転車を私に買い与えてくれたのですが、私はその自転車を見て複雑な思いをしました。みんな新しいのに乗っているのに、自分だけは中古だ。あのとき私は、子供心にではありますが、隣人のものを欲しがっていたということになります。聖書によれば、これは大変な罪だということになります。

こんなふうに言うと、初めて聞く方はびっくりします。だれだってみんな心の中で、あの人が持っているものを自分も欲しい。そんなこといつも思っているじゃないか。そんなことを思ってもだめだというのか。神は私たちの心の内のことにもどかどかと入り込んできて見張っているのか。それはまるで監視カメラで二十四時間私たちを監視している。キリスト教はなんて不自由なんだろう。だから宗教は嫌いだ。そう思われたかもしれません。

2　かつて、ひとりの不従順によって

（1）死が私たちを支配している

もちろん、神は私たちを不自由な牢獄に閉じこめようとなさる方ではありません。むしろ逆です。神は私たちの本当の状態を教えたいのです。あなたは大変な病気にかかっている病人だから、早く治療しないと重大なことになる。でも私たちには自覚症状がありません。大丈夫、私は健康だ。そう言い張っています。そこで神はだれもが否定できない事実を持ち出して、私たちの病気がどれほど深刻であるかを教えようとされます。

「罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がった。」今、新型インフルエンザの流行が大きなニュースになっています。最初はメキシコのある町で発見された病気でした。それが今や世界中に広まり、大きな脅威になっています。それと同じように、最初はひとりの人アダムが神にそむいた不従順の罪が、今や世界中に広まってしまった。そして全人類はひとりとして例外なく死ぬ者となってしまった。

私たちは思っていました。人間いつかは死ぬものだ。病気か、事故か、老衰か、それはいろいろあるけれど、でも人間は死ぬというのは当たり前のことだ。しかし、聖書は言います。私たちが死ぬと言うことは、実は異常なことなのだ。私たちはもともと死ぬ存在でなかった。しかし、罪がすべての人に広がってしまった結果、私たちは死を免れないものとなってしまった。あなたは大変な病気にかかっているのだ。

「私は罪人ではありません。」多く人々は自分が罪人であることを否定しようとします。しかし、私たちが遅かれ早かれ死ぬという事実までは否定することはできません。人類の歴史始まって以来、死ななかった人はいません。全員死にました。全人類が罪を犯したからです。人が死ぬという事実こそ、私たちが罪人であることの証拠なのです。

（2）アダムの違反が私たちに及ぶ

昔アダムと言う男が神にそむいた罪が、どうして自分たちにまで及んでくるのか。神に向かって文句を言いたくなるかもしれません。自分は関係ない。しかしどんなことに反発しようとも、私たちが死ぬという現実を動かすことはできません。

病院の検査の結果、重大な病気を告げられ

たとき、みんな思います。どうして自分がこの病気にかからなければならないのか。誰かに納得できる説明をしてもらいたいと文句を言います。しかし、どんなに文句を言おうがわめこうが、病気にかかったという事実は変わらない。それと同じように、アダムの不従順という罪が私たちにも及び、死ぬ者になったという事実は変わることはありません。

３　今度は、ひとりの従順によって

（1）アダムとイエス・キリスト

自分が間違ったことをした結果、死ぬことになった。もしそうであったなら、少しは納得するかもしれない。しかし、自分がしてもいない罪の結果を私たちが背負い込まなければならない。何か理不尽な気がします。しかし、パウロは私たちを理不尽な思いに陥れるために何もこんなことを言おうとしているのではありません。むしろ逆なのです

大昔の人、アダムが犯した罪が私たちにも及んできたことを納得することは難しいかもしれない。けれども、もし本当にそうであったというのなら、もう一つのことも本当のことにならないだろうか。もう一つのこと、それは何か。

二千年前に、神のひとり子であるイエス・キリストが、神に従順に従われていきました。どこまで従順であったか。この方は神の子ですので、マリヤをとおしてこの地上に来られたときから、私たちとは違って罪のないお方でした。罪のないお方であったのに、私たちと同じ肉をまとわれ、罪深いものと同じようになられました。そして私たちの罪をすべて背負い、そのさばきを十字架において受けてくださった。十字架の上でご自分のいのちを捨ててくださった。これ以上の従順があるでしょうか。最期の最期まで徹底的に従って下さった。それはひとえに私たちを救うためだったというのです。

（2）キリストの義が私たちに及ぶ

かつて、ひとりの人アダムのたった一つの違反の結果が、今の私たちに及んでしまいました。その結果、私たちは全員死ぬべき者となってしまいました。神への不従順が、それほどの感染力をもって全人類に増え広がっていったのです。

しかし今度は、全く逆さまなことが起きました。神であるお方が徹底的に従順に従って下さった。その結果、私たちは罪人という立場から義人という立場に移されていく。つまり神の前に全く正しい者とされていく。それは大変強い影響力をもって私たちに及んでくるのですよ。

パウロはアダムがしたこととイエス・キリストがして下さったこととを対比させて、こんなふうにまとめています。19 節。「すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。」

４　解決はどこにあるのか

（1）この世に解決を求めるのか

アダムが神に背いた結果が、今の私たちにも強い感染力をもって及んできている。そのようなことは認めたくありません。あまりにも理不尽なことに思えます。しかし、どんなに理不尽に思えたとしても、どんなに反発したとしても、私たちが死ぬという事実は動きません。

であれば、私たちはどうしたらよいのでしょうか。二つ考えられます。私たちは二つの中から一つを自由に選ぶことができます。

一つは、そんな聖書の説明など受け入れられないと拒み続けるという選択です。理不尽な仕打ちをされるように思う神に対してうらみつらみを投げつける。怒りをぶつける。そうやって、何とか自分で解決の道を探し求めていく。人間のすばらしい知恵を集めていけば、必ず解決できるのではないか。そこに希望を見出そうとする、そういう選択です。多くの方はこちらを選びとります。

では、解決の道は見つかったのでしょうか。先人たちが血眼になって捜そうとしましたが。しかし、人生の最期に死を迎えるときになって、すべての人々は認めざるをえませんでした。この世には解決がなかった。解決がないのですから、死は恐ろしいものにしか感じられません。健康なときは強がりを言っていた人でさえも、死が目前に迫ってくると、自分がこれからどこに行くのかわからないとおびえると聞きます。

（2）それとも与えられる恵みを受け取るのか

しかし私たちにはもう一つの選択肢が用意されています。15 節でこう説明しています。「もしひとりの人の違反によって多くの人が死んだとすれば、それにもまして、神の恵みとひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人々に満ちあふれるのです。」

解決はこの世にはありません。本当の解決は、この世ではない、別の所にすでに用意されています。イエス・キリストをとおして恵みと賜物が私たちに満ちあふれるというのです。アダムの違反によって全人類が死ぬものとなったというのならば、イエス・キリストの従順の結果はそれ以上の大きな恵みを私たちに与えてくださるのだと言っています。

どのようにしてこの恵みに与るのでしょうか。先ほど申し上げたように、私たちは選ぶことができます。そんなこと妄想だ。ありもしないたわごとだと言って、別の道を進むことも可能です。

しかしイエスの弟子たちのことを思い出してみたらどうでしょう。彼らは迫害にあっても恐れることなく前に進み、ついには多くの者が殉教したと言われます。これは妄想ではない。すべて事実であることを知っていたから。でなかったなら、死ぬ危険を冒すことなどできなかったはずです。

ですから私たちも、信仰の先輩者たちに倣い、確信をもって選びとっていきたい。パウロが言っていることは事実である。信じて受け入れられる現実である。そうして神が差し出される救いを受け取っていただきたいと願うのです。

最初に、ひとり息子を亡くしたやもめの母親のことに触れました。イエスは、母親の悲しみをご覧になられ、かわいそうに思われました。そして声をかけられました。「泣かなくてもよい。」神は、一人残された母親の悲しみを見過ごしにすることができません。またひとり母親を残して死ななければならなかった若者のいのちについても、神はあわれんでくださいます。

イエスは若者の亡骸がおさめられている箱に手をかけられ、こう言われました。「青年よ。あなたに言う、起きなさい。」すると

死んでいた者が起き上がり、母親のもとに帰りました。

信じられないような奇蹟に思えるかもしれません。しかし、私たちは遅かれ早かれ、一度死ぬことになります。しかし、神は私たちに声をかけて下さいます。「あなたに言う、起きなさい。」その声を聞いたとき、私たちは、死からよみがえります。永遠のいのちの中に入れられていきます。それが聖書の約束です。キリストがまず先に死からよみがえられました。

神が与えて下さる恵みにこそ、私たちの本当の希望があることをもう一度覚えたいと願います。